

十勝の山と平原に抱かれ 果てなく魂翔けるなり

大雪山国立公園に位置する「チセ・フレップ」

「赤い小屋」を意味するアイヌ語から名付けられた歴史ある山小屋

東ヌプカウシヌプリのふもとにあり、
アウトドア活動の拠点として、誰でも、
いつでも利用することができます。



子どもたちをはじめ、地域の人々と学生
との交流の拠点となっています。



小屋は二階建てで吹き抜けになっており、
ガス、水道、電気が通っています。



およそ30人ほどまで利用できますが、
恵迪寮で毎年5月に行われる新歓合宿では
約80人が小屋に寝泊まりします。



サークル活動や研究室などで
寮生以外の北大生も多く利用します。

士幌小屋チセ・フレップについて

小屋設立にあたっては恵迪寮生と士幌町が協力し、北大OB、教官、士幌町民、十勝支庁をはじめとする多くの
人々の助力を得ました。

設立の際に寮と町は「山小屋に関する協定書」を取り交
わし、今も共同で管理運営委員会を組織し、会議を行
い、小屋を維持しています。小屋は、学生が主体的に町
と関わってきたことの象徴でもあります。

発端は1975年、恵迪寮で同室になった5人が充実した
生活を送るべく様々な活動を行ったことにあります。彼ら
は活動の一環として、士幌町の町づくりのスタッフとして
活躍していた結城清吾氏を招き講演会を開きました。

講演後、結城氏と寮生はラーメンを啜りながら互いの思
いを語り合い、それは士幌町において学生と農業青年と
の交流を主とした「士幌自由大学」として結実します。

寮生は今後もこのような活動を続けたいと願い、士幌町
に活動の拠点を欲しました。

1976年には士幌小屋設立委員会が発足、計画の延期
や資金難など様々な困難を乗り越え、1978年、小屋は完
成をみます。そして委員会は士幌小屋チセ・フレップ運営
委員会と名前を変え、今に続いています。